

Gプロジェクト2016

Grow Up ~咲き始めた花たち~

佐々木 亘, 森永 初代, 濱崎 千鶴, 中村 民恵, 末永 勝征

G Project 2016

- Grow Up: The Flowers beginning to bloom -

Wataru Sasaki, Hatsuyo Morinaga, Chizuru Hamasaki,
Tamie Nakamura and Katsuyuki Suenaga

Gプロジェクトとは、学芸、情報、キルト、モード、フードの各プロデュースを学生が自主的に選択し、グループでの活動を通して個性の伸長をはかると同時に、プロデュース力、グループ力、コミュニケーション力の向上と問題解決能力の育成を目的とする、現代ビジネスコースの中心的なプログラムである。今回のプロジェクトテーマを「Grow Up ~咲き始めた花たち~」に決め、制作してきた作品の集大成を大学祭で発表した。さらに、錦江町との連携事業「地域貢献プロデュース」も4年目となった。各プロデュースがテーマに沿った作品をどのように制作し、演出・販売を行ったかを、学生たちのレポートを中心に報告する。

Key Words: [問題解決能力] [協働] [大学祭] [地域連携] [他者理解]

(Received September 11, 2017)

序

Gプロジェクトとは、「プロデュース力・グループ力・コミュニケーション力の育成」という「トリプルパワー・リフレッシュ教育戦略」である。現代ビジネスコースでは、個々の学生がグループ活動でのコミュニケーションを通じて集団の中で自分たちをプロデュースする力の育成を目指し、専門教育カリキュラムの特別研究に設けられた6つのプロデュースにもとづき、個性の伸長をはかるとともに、学生の総合的な人間性を高めることを大きな目標としている。2016年度は、プロデュースの名称変更を始め、すべてのプロデュースでシラバスの到達目標を統一し、学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）及び教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）に沿った指標とした。

今回は、学生一人ひとりが「Grow Up ~咲き始めた花たち~」という想いを共有し、各自がトリプルパワーを発揮して具体的な成果へと着手した。まず、発表部門を「春夏秋冬~季節

* 鹿児島純心女子短期大学生生活学科生活学専攻現代ビジネスコース（〒890-8525 鹿児島市唐湊4丁目22番1号）

を彩る花たち～」というテーマで3部構成にし、学芸プロデュースは、第1部を家族の支えと共に成長する主人公を描いた動く絵本で演出した。情報プロデュースは、第2部を映像開始の約1分で春夏秋冬を色画用紙や折り紙の花々で立体感を表現し、スケッチブックリレーでは、学生の思いをスケッチブックに書き込みバトンを渡すような演出を行った。モードプロデュースは、ドレス制作をとおして表現力を養い、第3部を一人ひとりがそれぞれ個性的な演出を試みた。次に、展示部門においてキルトプロデュースは、共同制作で6つのプロデュースのモチーフを決め、アップリケで表現した。そして、フードプロデュースは、食品販売部門としてアップルパイとクッキーの制作と販売を行うと同時に、Gカフェで新製品を考案するなど、1・2年生が一致団結して、大学祭における憩いの空間作りに取り組んだ。さらに、4年目をむかえる地域貢献プロデュースは、錦江町の方々と協力し純心水田プロジェクトを行うなど、精力的に活動した。特に2017年3月にローソンで期間限定販売された「クッキーサンドいちごのフロマージュ」は好評を博した。

Gプロジェクトは、中央教育審議会答申を受け、昨年度から教育課程の体系化、単位制度の実質化、学士課程教育における学士力を意識し、地域貢献を除く5つのプロデュースで改善に取り組んでいる。前期は、全体の目標を正しく理解し、課題を解決する中で新たな課題を設定し、目標を実現するための具体的な実行計画を立案する能力の育成を到達目標としている。また、本学においても、開学から現在まで女性の教育ニーズに適合し、女性の教育水準の向上と地域の発展に寄与する身近な高等教育機関として、社会に有為な専門職業人材・地域の中核的人材を育成することを使命としているが、少子高齢化が進行し若者の流出による地域間格差の拡大によって、直面する地域創生の核としての課題が山積みになっている。

本報告は、2016年度に行われた「Gプロジェクト」の内容に関する情報発信を目的としている。現代ビジネスコースにおける教育戦略は、この報告をPDCAサイクルの一つとして、さらなる発展を模索していく。

I. 情報プロデュース

学生たちは、1年次の春休みに、前年度の情報プロデュースのメンバーから活動内容を引き継いでいる。1年次は、WordやExcel中心の演習で、macOSに触れる機会が少ない。前期中は、いくつかの課題をとおしてPagesやKeynote、iMovieといったmacOSに付属するアプリケーションやペンタブレット、スキャナなどの周辺機器の操作を習得する。全員で同じ課題に取り組むことはなく、お互いに経験した学習を共有するために、昨年から前期単位認定試験期間中に活動報告会を実施している。自分の活動を振り返り、情報を整理し、人に説明することで、理解の足りないところを深める。また、3つの到達目標に関し自分自身とチーム、それぞれの観点から活動を振り返る。計画通りにいかない経験や失敗を共有することで、相互確認の大切さを知り、チーム内で改善点を指摘し合える人間関係を構築している。

夏休みから大学祭までは発表部門の映像制作に多くの時間を割くことになり、平行して上記の課題に取り組むことは困難であった。そのため、予定していた卒業論文の中間報告会を中止し、代わりに後期単位認定試験期間中に、ポスター発表を行うことにした。A3用紙1枚に卒業

論文をまとめることで、論点が明確になり、お互いに内容の把握が容易になる。ポスター発表が初めてで、Pagesで作成した資料が見やすいものになっていなかったため、再提出を指示した。結果的に、学生の負担が増えてしまったものの、周りからの意見で卒業論文やポスターの修正が行えたと肯定的な意見であった。引き継ぎ資料としても活用できるため、次年度以降も継続したい。

後期の到達目標に関する振り返りでは、「大学祭の係りを担当したことで、活動に参加できない分、積極的に情報共有に努めた」とか、「計画通りに行かなくとも、さらによりアイデアが生まれたらシフトチェンジする勇気も大事である」と、集団としてよい方向に向かって活動できていたことがうかがえる。

2016年度の大学祭に向けての詳細な取り組みは、チーフである三井麻美子の報告を参照されたい。(森永初代)

2016年度の情報プロデュースは、「Gプロジェクト」の発表部門の映像制作を、4月から9名で熱心に取り組んできた。2016年度の大学祭の現代ビジネスコースのテーマは、「Grow Up ～咲き始めた花たち～」という「成長」を表現するテーマで、Gプロジェクトのテーマに沿った映像の演出をするために本番まで何度も試行錯誤を重ねた。

情報プロデュースでは、先輩方も学んできた歴史と伝統ある校舎を背景に、さまざまな出来事を体験し、成長していく学生の様子を映像に映し出したいと考えた。最初の活動として、意見を出し合い検討を重ねた結果、「あの日あの時あの場所で…」(図1)を情報プロデュースのテーマに決め、自分たちが作りたい映像となるような表現方法を模索することになった。

メンバー内で「歴代の先輩方を超えるこれまでにない映像を作りたい」と意思の統一を行った。しかし、本格的に映像のイメージを考え始めた際は、自分たちの考えをどのような形にすればよいのか分からず、スムーズに活動を進めることができなかった。そこで、まずは先輩方の作品とは異なる表現方法を見つけることから始めた。話し合いを重ね、「スケッチブックリレー」(図2)と「コマ撮り」(図3)を組み合わせ、これまでにない映像作り挑戦することにした。

スケッチブックリレーの手法を用いたのは、人と人とのつながりの中で成長していく学生の姿を表現したかったからである。「つながり」を表現するために、それぞれのメッセージを書き込んだスケッチブックを学生同士で撮影場所を変えなが



図1 テーマ



図2 スケッチブックリレー



図3 コマ撮り

らりレーにした。コマ撮りにした理由は、春夏秋冬の花々を手作り感溢れる温かい雰囲気表現をしたいと考えたからである。「コマ撮り」の特徴であるアニメーションと実写の中間のような絶妙な表現となる利点を活かすために、折り紙や画用紙を使用することにした。

情報プロデュースのメンバーの中には細かい作業を得意とする学生も多かった。折り紙や画用紙を使用して作成することは、時間のかかる地味な作業であるが、楽しみながら作業をすることで、自然にアイデアも生まれた。この活動をとおり、普段の学生生活では知ることのできないメンバーの一面を知り、お互いの距離も近くなった。些細なことも話をするすることで、自然と情報共有ができ、メンバー内でプライベートなことも支えあうことができた。

情報プロデュースのチーフに決まった当初は、今まで人をまとめる経験をしたことがなかったため、自分にチーフという立場が務まるのかという不安を持っていた。情報プロデュースとしての活動が本格的に始まってからも、チーフとして何をしたらよいかわからず、空回りばかりであった。しかし、他のメンバーの支援を受け、自分にできることは人一倍頑張ろうという前向きな気持ちで取り組むことができた。

完成した映像は最初に考えていた映像とは違うもので、制作段階では、「本当にこの映像で見ている方々に自分たちの思いが伝わるのか」と不安ばかりであった。しかし、大学祭終了後に現代ビジネスコースだけでなく、学内のさまざまな方々からお褒めの言葉を直接いただいた。途中で投げ出さずに熱心に取り組んだからこそ、私たちの思いが通じたのだと思う。

情報プロデュースのメンバーは展示や食堂喫茶、バザール、受付などのチーフやサブチーフを担っている学生が多く、各自の役割がある中でも、情報プロデュースの活動も手を抜くことなく熱心に取り組んでくれた。チーフとして感謝の気持ちでいっぱいである。さらに、映像についてアドバイスをしてくださった先輩方やさまざまなサポートをしてくださった先生方、そして温かく見守ってくれた両親など、大学祭はたくさんの支えがあるからこそ成功するものだと感じた。

私が今回映像制作をとおして特に感じたことは、楽しみながら活動するかどうかによって、作品の仕上がりも変わってくるということだ。当たり前なことではあるが、一番大切なことである。

情報プロデュースの活動をとおり、わからないことは、人に聞く前に自分で調べることの大切さを学んだ。一緒に活動したメンバーからも学ぶことは多く、情報プロデュースで経験したことは私にとって、かけがえのない財産となった。映像の最後のシーンに出てくる言葉のように「みんながいるから成長できる」(図4)を忘れず、これからも1日1日を大切に過ごし、日々成長していきたい。(三井麻美子)

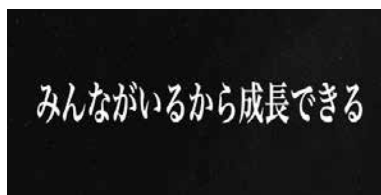


図4 最後のシーン

Ⅱ. 学芸プロデュース

学芸プロデュースでは、共同研究として、大学祭での発表を目指し、「動く絵本」作りに取り組んだ。2016年度は、人数が6名であった。多くもなく少なくもなく、そういう意味では理

想的であった。当初、環境問題をテーマにシナリオを作成したが、森が舞台になるだけに、前年度の作品との類似性が先生方から指摘され、前期の終わりに全面的に書きなおす事態におちいった。しかし、6名が一致協力した結果、メッセージ性の強い作品に仕上がりに、大学祭2日目の2016年10月23日（日）に、発表部門の第1部を、無事飾ることができた。

今回、メンバーの中に特に画力やパソコン処理能力に秀でた学生がいたわけではない。しかし、6名のチームワークは見事であった。シナリオでは、「見る人に伝わる、分かりやすいストーリー」、「登場人物の成長」、「メッセージ性」に着眼して、父と喧嘩して家を飛び出した娘に死んだ母が高校生の姿で現れるという内容になった。作画では、顔の表情などを描くことが得意な学生3名を人物班、残りの3名を背景班とわけ、互いに連携をとりながら作業を進めていった。前者はさらに、作画担当1人と色塗り担当2人に分け、最初はアナログで描いた絵をスキャナで読み込み、それをパソコンのソフトに取り込んでなぞって描き、その後はペンタブレットで直接入力した。娘の七海と高校生の姿の母美雪が出会うシーンでは、現代と昭和の服装や髪形の違いを出したかったため特に力を入れた。

大学祭終了後は、個人研究として卒業論文の作成に取り組んだ。ほかのプロデュースとは異なり、学芸プロデュースでは卒業論文を製本して図書館に開架図書として寄贈している。そのため、完成までにかかなり厳しいハードルを設定しているが、ほぼ全員卒業までに達成することができた。「KING OF POP－世界に目を向けたスーパースター－」、「アナウンサーの魅力～司会を通して～」など、興味深い内容になっている。今回培ったチームワークを、今後も社会人として活かしてもらいたい。（佐々木亘）

2016年度、学芸プロデュースは1年次の春休みから活動を始め、早い段階でスケジュールを立て、お客様に伝わりやすい作品を作るという目標のもと活動してきた。2016年度は、メンバーが6人と昨年の2倍に増えたため、それぞれの個性を活かしたいと思い、まずはメンバーがそれぞれどういう物語にしたいのか、登場人物はどうするかなどアイデアを出し合った。そして、全員に役割を振り分けたいと思い、メンバーを作画班と背景班に分けた。

活動する中で、苦労した点が大きく三つあった。一つ目は、脚本の全面的書き直しである。1年次の春休みに意見を出し合い、最初の脚本は4月に出来上がった。大学生らしく、環境問題をテーマにし2人の主人公が成長していく過程を描いたストーリーにした。5月にはキャラクターデザイン（図5）や、アナログでイラストを作成する作業を始め、計画通り、順調に活動が進むと思った。



しかし、6月の中旬、主人公の設定や背景のイメージが過去の作品に似ているというご指摘をいただき、脚本の変更をすることにした。自分たちの考えだけで脚本の作成を進めていたため、客観的に見ていただく機会を早く作っておけばよかったと反省した。この反省を踏まえ、完成した脚本は先生方や発表部門の学生に読んでいただき、仮の動画が完成した際も、先生方、現代ビジネスコースの学生に鑑賞していただいて意見を求めた。

二つ目は、予定通りに活動を進められず、大学祭前まで修正を続けることになった点である。これは、脚本の変更が入ってから、明確なスケジュールを立てずに活動してしまったためだと考えられる。また、メンバーがそれぞれ作業に必要な道具を持っているため、自宅で作業が進められると考え、夏季休業中の学校での作業時間の計画を短く立ててしまったことも、予定通りに活動を進められなかった大きな原因であると考えている。夏季休業の後半に、細かい計画を立て直し、後期が開講してからバタバタしながらの活動になってしまった。

三つ目は、発表部門のプロデュースとの情報共有を行うことだ。はじめのうちに、発表部門内で週に1回はミーティングを行うという計画を立てていた。しかし、プロデュースの活動が忙しくなるにつれて、他のプロデュースとの情報共有をする余裕がなくなってしまい、結局前期中はほとんどミーティングを行うことなく終わってしまった。そのため、他のプロデュースの進み具合が分からないままであった。このことを反省し、夏季休業中には、発表部門内のプロデュースのチーフが集まりミーティングを行うことにした。やはり、ミーティングを行うことで、他の進み具合がよくわかり、今後の活動について見直す良い機会になった。それとともに、早いうちから情報共有をしっかりと行っておけばよかったと実感した。大講義室での発表の通しの練習が始まることも頭に置いて作業を進めていかなければならないことも分かり、細かいスケジュールを立て直すきっかけにもなった。夏季休業から純大祭までの期間中、こまめにミーティングを行い、より良い舞台発表になるように構成を練っていった。

2016年度の現代ビジネスコースのテーマは「Grow Up ～咲き始めた花たち～」であり、学芸プロデュースは、家族の中での主人公の「成長」を描いた作品を作成した。昨年は、発表部門の中でもプロデュースごとにテーマを決めて舞台を構成していたが、2016年度は、「成長」が現代ビジネスコースのテーマであり、これが伝わる舞台にしたい、プロデュース間のつながりを大切にしたいと考えたため、プロデュースごとのテーマは定めず、それぞれが「成長」をテーマに作品を創り上げた。

学芸プロデュースの作品の流れは以下のとおりである。主人公の七海は、進路のことで父と喧嘩してしまい、家を出てしまう。あてもなく歩いていると、あるセラー服の高校生と出会う。その高校生は、七海が幼い時に亡くなってしまった母である。七海は自分の思いを話し、また母の言葉を聞くことで、父への感謝の気持ちと、自立して成長したいという思いを改めて実感し、前を向いて歩き出す決心をする。

登場人物の心情描写は、人物の表情やセリフだけでなく、背景の「天候」を利用して表現した。例えば、序盤での誠司の回想シーンでは、妻である美雪との結婚を「幸せ」であるということを伝えるために、「晴れ」(図6)の一枚を加えた。そして、美雪が病気になり、亡くなる

までのシーンの前に「曇り」、美雪の葬式のシーンの直前に「雨」の背景を加え、誠司目線であるために、回想にあまり出ることのない誠司の心情描写をこのような形で表現した。



図6 晴れの描写



図7 冒頭的美雪

冒頭部分の、高校生の時の誠司と美雪の会話のシーンでの、美雪の「これからの未来がすごく楽しみなの」というセリフが、後半の七海が一人暮らしのために家を出ていくシーンでの、誠司の回想と繋がっている点に力を入れた。高校生の時のシーンでの誠司は、美雪の言葉への返事はせずに終わっている。また、美雪の表情は出していない（図7）。しかし、最後の誠司の回想では、満開の桜の中微笑む美雪の表情が見え（図8）、誠司が返事をしている。ここでは、高校生の誠司と父となった誠司の声が重なるようにし、セリフが目立つように背景は黒にした。

成長したのは実は主人公の七海だけではない。父である誠司もまた、家族を失ってしまうのではないかという恐怖と向き合うことから逃げず、物語の最後には七海の旅立ちを祝福している。この点にも注目して作品を見ていただきたいと思う。

1年次の春休みから始まった学芸プロデュースの活動の中で、苦労した点が多かった分、本番での感動はとてもの大きかった。このように長い時間をかけ、メンバー全員で一つの作品を作り上げるという経験は滅多にできないことである。貴重な経験ができたことを嬉しく思う。（宮田智美）



図8 後半の美雪

Ⅲ. モードプロデュース

2016年のモードプロデュースも「ゼロからのスタート」。これまでに裁縫など経験したことのない9名が選択した。9名というこれまで一番少ない人数で、いかに自分たちの舞台を演出していくかが、プロジェクト初動の課題となった。

前期の到達目標は、全体の目標を正しく理解し、課題を解決する中で新たな課題を設定し、目標を実現するための具体的な実行計画を立てることができるとなっている。大学祭でのコース全体のテーマ、発表部門でのテーマを理解するために何度もミーティングを重ね、情報を共有する努力はしていた。しかし、制作においては個人ということもあり、進度にはかなりの個人差が生じた。

人数が少ないことで限られたスペースを有効に使うことができたはずであった。しかし個人の見通しの甘さから、立てていた計画以上に時間がかかり、制作が思うように進まなかったこと、予定されていた時間に制作活動が出来なかったことなど、技術の面と時間の使い方に問題があった。さらに本人の意識の持ち方でも制作に大きな影響を与えた。

後期、9月からは舞台構成を考えるが、9名という人数を最大限生かすための演出を考えなければならなかった。ドレスを制作しながらの課題でもあった。また、テーマを観客に伝えるためにはどうしたらいいのかということも昨年度からの課題となっていた。制作したオリジナルドレスを着装して舞台に立つことから始まったモードプロデュースであったが、年数を重ねるごとにメッセージを明確にしていった。

Gプロジェクトの初期は部門ごとにテーマを決めていたが、2011年からはコースの学生全員が想いを共有して取り組み始めたことがわかる。これらのコーステーマをふまえ、第9回目は「Grow Up ～咲き始めた花たち～」に決定した。このテーマをモード選択者9名と大裁女物

単衣長着（浴衣）で表現しなければならない。求められる表現力は年々高くなるなか、情報プロデューズ選択者の協力のもとスクリーンに映像を投影することで、観客によりわかりやすくメッセージを伝えることを試みた。石井原の報告にもあるように舞台冒頭で情報プロデューズの鷺尾美鈴による手書きの題目「春夏秋冬」を投影した。

さらに桜が舞い散るシーンなどの映像を加えることで、制作したドレスだけでは伝えることができないメッセージを補った。映像をプラスすることで、より明確にメッセージを伝える努力をしている。

表1 過去のテーマ一覧

第1回	2008年	発表部門	幸せになるためのSymphony
第2回	2009年	発表部門	華～あなたへ花束のプレゼント～
第3回	2010年	発表部門	Je suis princesse（私はお姫様）
第4回	2011年	コーステーマ	「Heart to 心」－震災復興への思い－
第5回	2012年	コーステーマ	Colorful～未来の花を咲かせよう～
第6回	2013年	コーステーマ	「Be myself～素直な気持ちを伝えよう～」
第7回	2014年	コーステーマ	「Hearts in Harmony～みんなで届けるありがとう～」
第8回	2015年	コーステーマ	パズル～繋がるpiece 届けるhappiness～

後期の到達目標、集団での活動に対する自分の役割において、舞台上でテーマに沿って演じることができなければならない。そのために何度もカメラで撮影した映像を見直し、改善しながら自分たちの想いを観客に伝えようと活動していた。舞台発表を成功させるためにそれぞれが、舞台上で演じるだけでなく、裏方の仕事にも積極的に取りくみ、他のプロデューズとの連携を図り、集団として同じ方向に向かって活動していた。また、計画通りに進まないことにたいしてはミーティングで意見を衝突させながら解決策を見出していた。自分の考えを言葉に表現する能力が如何に必要であるかを痛感していたようである。

大学祭以降は自身の活動を振り返りレポートを作成する。その中で、集団における個の役割について考えることで、人間性を高めることができているのではないかと考える。（中村民恵）

モードプロデューズではコースのテーマである「Grow Up ～咲き始めた花たち～」に沿って、「Grow Up（成長）」を「春夏秋冬」の流れと重ね合わせて演出を考えた。桜が舞い散る情景やクリスマスツリーをスクリーンに投影することで季節感を演出した。さらにシーンに変化をもたらすために大裁女物単衣長着（浴衣）のシーン後の演出にこだわった。春の嵐により桜の花が散りゆくすべてをドレスの上にマントを着用し、二人の激しい動きにより嵐を表現した。このように、今回はバックスクリーンに映像をプラスすることで、それぞれの季節感をよりわかりやすく演出した。

また、エンディングには、幼い時代の写真をスクリーンに投影し、自分達の成長も重ね合わせた。「Grow Up（成長）」をより観客に感じてもらうためにエンディングで表現できたのではないかと考える。

シーン1 出逢いの春（大裁女物単衣長着，9）

シーン1の春は、出逢いを表現している。春といえば出逢いの季節。これから大人への一歩

を踏み出すというシーンを、桜の花びらが舞い散る情景と重ねることで春の季節を表現した。この桜の花びらが舞い散る映像は情報プロデュースが制作を担当してくれた。

シーン2 春の嵐

春の嵐と新しい出逢いで不安な心の動きを表現するために、ドレスをマントで覆うことで表現した。さらに照明により雷の雰囲気を作り出し、マントを着用した動きと音と光により嵐を思い起こさせた。また、新しい出逢いの中で、心に余裕がないという気持ちも表現されている。

シーン3 初夏 (図10)

初夏の海の青さと少し前に向かって成長しているイメージで演出した。また、「優しさ」で溢れるような表情にも注目してほしい。これまでは自分のことしか考えられなかったが、相手のことを考える余裕ができたことを二人が目を合わせ、一人じゃないということを表現している。

シーン4 静かな夏の夜 (図11)

静かな夏の夜空と自分の成長に満足していないというせつない心の模様を演出した。冒頭ではせつない気持ちで登場するが徐々に自分と向き合い笑顔を取り戻すようになる。自分探しをしているシーンである。三日月と星をバックスクリーンに投影することで、静かな夏の夜を表現することができた。この映像も情報プロデュースが制作を担当してくれた。

シーン5 晩秋 (図12)

木々が紅葉し深まりゆく秋の情景と鏡の中に映し出された自分を演出した。お互いが鏡となり相手に映し出されている。その姿は葛藤や挫折をしながらも、人生の困難に立ち向かっていく強い女性を表現し、迫力のあるシーンにすることができた。

シーン6 冬 (図13)

クリスマスの訪れを心待ちにしている愛らしい雰囲気を演出した。シーン1から5まで大人の女性になるために成長していく姿を表現していたが、シーン6はクリスマスを楽しむ姿に乙女心を重ねた。さらにクリスマスツリーをバックスクリーンに投影することで、より季節感を感じられるように工夫した。



図9 シーン1



図10 シーン3



図11 シーン4



図12 シーン5



図13 シーン6

シーン7 未来への春 (図14)

季節は巡りまた春が訪れるシーンでは、未来への希望に向かい、ここからまた一步、大人に向かって歩いていくという気持ちを表現した。春夏秋冬と季節は巡り、一人の女性として旅立つ瞬間でもある。エレガントに見せるために目の動きや表情に気を付けた。音楽に合わせて二人が同じ方に目線を合わせるなど演出にもこだわった。



図14 シーン7

はじめは、「春夏秋冬～季節を彩る花たち～」というタイトルをスクリーンに映し出した。パソコンの文字ではなく情報プロデュースの鷺尾美鈴が墨字で書き、スキャナで取り込みスクリーンに投影をした。パソコンの文字では表現することのできない芸術的な雰囲気をかもしだすことができた。次のシーン1での桜の花びらが舞い散る情景も情報プロデュースが制作を担当してくれたが、この映像がより季節感をわかりやすく演出してくれた。

エンディングでは、音楽の歌詞にこだわった。今までの演出ではエンディングに使用していた曲は洋楽であったが、今回は「AGAIN」というDREAMS COME TRUEの曲を使用した。



図15 エンディング

この曲の歌詞に自分たちの心のうちを重ね、曲と共に幼い時代の写真をモノクロで映すことで、これまでの自分たちを振り返るとともに「Grow Up (成長)」を表現した。

二十歳になるまでには多くの方々に支えられ、出逢いがあり、自分との葛藤のなかで成長してきたことをメッセージとして最後に伝えたかったからである。(図15)

今回、たくさんの方々に支えられていることにGプロジェクトの活動をとおしてあらためて気づくことができた。悩んだときにすぐにつけ、アドバイスをしてくださった先輩方、どんな時でも見守ってくれた両親、最高の作品を作り上げるために厳しく指導してくださった先生方に感謝の気持ちでいっぱいである。

先輩方からバトンを受け取り、次に受け継ぐことができた実感する。仲間とともに戦った7か月間、プロジェクトを完結するなかで、深まった絆はこれからの人生において大きな糧になった。どんな時でも仲間がいるから乗り越えられる、常に感謝の気持ちを忘れずにこれからも歩んで行きたい。(石井原美友)

IV. キルトプロデュース

2016年度、これまでのテキスタイルプロデュース (パッチワーク) からキルトプロデュースに科目名を変更した。変更理由は、作品を制作するにあたり、パッチワークだけではなくアプリケーションや刺繍など多くの技術を組み合わせることでデザインをよりよく表現することが可能になるからである。また、トップを制作後、トップ・キルト芯・裏布を重ね、キルティングで仕上げることを作品の条件とし、あわせて、ハワイアンキルトやアメリカンキルトなど、幅広くキルトに触れて、感性を磨くひとつのきっかけとなればと考えたからである。

活動内容は、大学祭が中心であるが、これまでの活動に加え、布に関する研修の一環としてクリーニング工場の見学を行った。大学祭の活動については、学生の報告を参照していただきたい。見学前に、クリーニングの流れについては前期開講「服飾文化論」で学んでいたため、実際の現場を見学することで学んだことを少しでも理解し肌で感じる事ができれば、また汚れた衣服（布）がきれいになる過程、衣服を丁寧に扱うことの大切さを知り、これからの生活に役に立てばと思い取り入れた。実際に、学生たちは現場で働く方々、作業の効率の良さなどをみて、布に関すること以外に、仕事に取り組む姿勢（自分の立ち位置）、作業の進め方（協力すること）などを学ぶことができたのではないかと思う。

実際、学生たちの活動を見ていて感じたことは、ひとつの心で活動していくことの難しさである。前期の間、共同制作を行うにあたり、意見を求められても答えられない、言われたまま行動するなど、積極性に欠ける部分がみられたと同時に、自分のことで精いっぱいになり、協力する姿勢があまり見られなかった。しかし、時間の経過とともに、髪飾りを含め共同制作をとおして相手の意見に耳を傾けること、相手にも作品にも丁寧に接すること、協働することの大切さを実感し、自分の都合ではなく全体を見て、今何をすべきかを考えて行動する姿勢が見られるようになった。また、どのように表現すれば、見に来てくださった人たちが自分たちの想いをしっかり受け取ってくれるかを考えながら制作することで、相手の視点に立つことの大切さも学んだのではないかと思う。

この活動をとおして身につけたことを、これからの社会の中でますます活かしていくことを願う。（濱崎千鶴）

2016年度は、12名で活動し、大学祭に向けて、共同作品、個人作品、髪飾りを制作した。これらの活動を下記に記す。

共同制作では、「成長」をテーマに制作を行った。「Grow Up ～咲き始めた花たち～」というテーマより、ここまで成長してきた中でお世話になった方々、これから咲き始めるために支えてくださる方々への感謝を表したいと思い、どのようなデザインで表現するかをメンバー全員で話し合った。まず、感謝を「ハート」で表現する。そのハートを成長の意を込めて蔓で表現することに決まった。あわせて自分たちを表現するために、サンボンネット・スーをモチーフとして用いることにした。



図16 共同制作の作品

次にハート、蔓、サンボンネット・スーをどのようにデザインするかを考え、サンボンネット・スーで6つのプロデュースを表し、ハート型にした成長の蔓でサンボンネット・スーを囲み、現代ビジネスコース全員を繋ぎ合わせ、コースの絆を示した。また、サンボンネット・スーにそれぞれのプロデュースごとの特徴と思われるものを持たせ、フードプロデュースは「りんご」、モードプロデュースは「ドレス」、情報プロデュースは「カメラ」、学芸プロデュースは「絵本」、キルトプロデュースは「針と糸」、地域貢献プロデュースは「でんしろろ」と表した。他に、土台の布の素材や刺繍糸の太さ、刺繍糸と布の色バランスなど試行錯誤しながらメンバー全員で決めた。昨年度までとは違い、共同制作の中にコース全員の名前やイニシャルを入れる

のではなく、一年次に制作した浴衣の布切れを緑の部分に使い、さりげなくクラスの絆を表す形とした。(図16)

制作状況については、期限内に仕上がったが、細かい部分が多かったことから予定していた計画より制作に時間が掛かってしまった。しかし、時間配分をしたり、役割分担をしたりすることでミスや無駄な時間を減らし、良い作品に仕上げることができた。

個人制作は、作るもの・使用する技法は自由であるが必ずキルティングの技法を取り入れて制作することが条件であった。

2016年度は、テーマにある「花」を取り入れ、それぞれ制作した。一人ひとり作るものの大きさや難易度に違いがあったが、全員期限内に作品を提出することができた。2016年度のメンバーの作品は、ポーチ・クッション・マット・バッグなどあり、なかでもクッションを作る人が多かったが布やデザインにそれぞれ個性が出ていた。また、技法としてはアップリケ・ハワイアンキルト・刺繍・パッチワークなど使用した作品が多かった。中でも目を引いたのがハワイアンキルトの技法を使用した作品であった。とても色鮮やかで大きな作品ということもあり、強く印象に残っている。

制作状況については、それぞれ作るものの大きさが違い、完成までに多少の時間差が生まれたが、空き時間や放課後を上手に使い、メンバー全員計画的に作り終えることができた。

現代ビジネスコースの学生に配る髪飾りについて、布の色や柄からデザインまで全てメンバー全員で意見を出し合い決めた。2016年度は布で作った大きなりボンのヘアゴムを制作した。昨年度までの髪飾りとは違うパターンで作りたいと思い、学校内外で使用できるデザインを目標にした。中でもりボンの形や大きさなど決めるのが難しかった。布の柄は、流行であるペイズリー柄に決まった。1年生は赤色、2年生は白色(図17)にし、学年ごとで色を分けた。工夫したところは、髪が短い人のために他の使い方があればと思い、りボンは大きめにし、腕などに付けても目立つようデザインしたところである。



図17 髪飾りのりボン

共同制作の反省点として、蔓で表現したハートの中にサンボンネット・スーをバランスよく配置することが難しく、デザイン決めに時間が掛かってしまったことが挙げられる。また、確認不足から最初の土台の布に刺繍する蔓の位置が左に寄ってしまっていたことで、下書きからやり直すという無駄が出てしまった。メンバー全員が大体同じ時間だけ制作に関わることが目標であったが、個人制作と同時進行だったため、それぞれ共同制作に関わる時間に差異が生まれてしまったことなども挙げられる。

2016年度の反省より、来年時は夏休み中に共同制作を大体完成させ、後期には個人制作を中心に制作できるよう計画を立てたほうがよい。また、布のサイズや配置などしっかり確認して制作して欲しい。

個人制作の反省より、余裕を持って制作できる作品を選び、大きさや細かさなどよく考えて制作することを心がけ、メンバー同士で進行状況を確認することが大切だと思った。

髪飾り制作の反省点は、髪飾りの数に対し布を大量に余らせてしまったことである。原因は、

リボンを作る布のサイズと人数の確認不足であった。このことより、日頃から何事も確認することの大切さを学んだ。

制作状況に関しては、予想していたより時間は掛からず、スムーズに早く完成させることができた。1年生、2年生に配る際、みんな喜んでくれたため、作ってよかったと改めて思った。また、大学祭以降も髪の毛やバッグに付けている学生を見かけ、作った側として何よりも嬉しかった。チームでの活動だったため、それぞれ意見が違い、うまくまとまらず大変な時もあったが、そのような経験をしたことから協調性が身に付き、その大切さを実感できたよいう大学祭であった。(久保有里恵)

V. フードプロデュース

2016年度は32名での活動となった。フードプロデュースは5つのプロデュースのなかで、選択者が一番多い。うまくまとまれば大きな力となり、まとまりがなければ一人ひとりが持っている力すら出すことができない。1年間のプロデュース活動をとおして、学生一人ひとりの力を引き出すための活動内容の一つとして大学祭があるが、大学祭の活動報告は、学生の報告を参照していただきたい。

大学祭の他に、実際に郷土料理を作り、学外実習として郷土料理の店で食事をいただき、地元のスーパー等を調査し、食に限らず鹿児島の特産物についての講話を聞くなど、本物に触れる機会をできるだけ多く取り入れた。本物に触れることは、心も満たされることにつながるのではないだろうか。また、学生たちは、専門家の話を聞くことで持っている知識も深まり、これまで興味関心がなかったものにも触れ、視野が広がる。そして、自ら疑問に思ったことを質問することで、人との関わりも広がっていく。その経験の中で、何が必要か理解しながら、足りないことを補う思考力や行動力を身につけることができればと思い指導した。

また、最後の卒業研究では、多くの学生がこれまで学んだことをもとに最も興味ある食材、または地元の食材を使って、料理するよう促した。この研究をとおして、まずは地元に関心を持つこと、そして実際に調理し、誰かに食べてもらうことで、自信が付き、次につなげることができればという思いがあった。

実際、卒業までにどれだけの力を身につけることができたのか？学生自身、次のような力がついたと言っている。協力して作業することの楽しさ、団結力、自ら考えて行動する力、積極性、計画性と実行力、周りを見て行動する力、協調性、感謝の心などであった。2年次初期からすれば、多くの経験、出会いをとおしてフードプロデュースの仲間としてまとまり、相手のことを考え行動できるようになった。まだ十分とは言えないが、これから社会人として生きていく中で、磨き成長し続けていくことを願う。(濱崎千鶴)

2016年度のフードプロデュースのメンバーは32名であった。授業での実習以外にクッキー・アップルパイ・Gカフェの3部門に分かれ大学祭に向けて活動した。クッキー担当の学生は、1年生のサポート役として、アップルパイは全員で、Gカフェは1年生の協力を得ての活動であった。大学祭に向けて活動していくために、4月に各部門のチーフ・サブチーフで目標および年

間計画を立て商品づくりを行った。2016年度のGコースのテーマは、「Grow Up ~咲きはじめた花たち~」であった。フードプロデュースでは、花をイメージしたラベルや、パッケージにすることで、コーステーマとの関わりを表現した。

(図18, 図19, 図20)

アップルパイは、伝統のレシピを引き継ぎ、制作に関わる全員が同じレベルのものを作るように意識の統一に力を入れた。また、クッキー・Gカフェでは新たな取り組みとして熊本復興支援の活動を行った。今回は主にその熊本復興支援の活動について述べることにする。

2016年度のフードプロデュースでは、あらたな取り組みとして熊本の特産品を使用したクッキーや飲み物の販売を行った。熊本県は、2016年4月に発生した熊本地震によって甚大な被害がでた。そこで隣県に住んでいるわたしたちに何かできることはないかと考え、熊本に大学祭の売上の一部を寄付することにした。

熊本産の食材を使用したクッキーを制作したいと考えた。何種類か試作を行いクッキーの材料に適した南阿蘇のレモングラス、天草の塩、ココアの3種類の味のクッキーを5枚1袋100円とし、くまもと応援パック(図18)という商品で販売した。Gカフェでは、蛍丸サイダー(図21)の販売を行った。蛍丸サイダーは1本250円で販売されており、阿蘇神社の復旧工事の費用に1本100円分が寄付される。

できるだけたくさんの人にこの活動を知ってもらうために、ポスターや、現代ビジネスコースの学生保護者に配布していただくチラシを作成した。当日はアップルパイや、クッキーと同じ場所での販売だったが、Gカフェの場所にも大きく展示物を掲示しておくことでGカフェを利用してくださったお客様がそのまま蛍丸サイダーを買ってくださった。宣伝効果もあり、二日間で96本のサイダーを完売させることができた。これによってクッキーの売り上げ20,000円は国連WFP協会熊本復興支援に、サイダーの売り上げ24,000円は阿蘇神社の復旧工事に使用される。

大学祭当日は、クッキー、アップルパイはチーフ、サブチーフに加え、1年生に協力してもらい、販売を行った。Gカフェは、学生ホールで制作するため、朝しっかりと掃除を行い、器具や材料の準備、確認作業を行った。販売時は、来てくださったお客様への感謝の気持ちを込め、笑顔で販売するこ



図18 フラワーパック (左)
くまもと応援パック (右)



図19 アップパイラベル



図20 Gカフェラベル



図21 蛍丸サイダー

とを心掛けた。

売上、経費、純利益は下記の表のとおりである（表2）。販売数は、フラワークッキー 600袋、熊本応援パック200袋。また、形が悪くお客様に販売できないクッキーを学生販売用として袋詰めをしたもの152袋を1袋50円で販売した。アップルパイはシナモン有と無の2種類1箱1,200円で102箱、Gカフェでは、新メニューのカルピスグレープゼリーを含めた、10種類と蛍丸サイダー 96本であった。これらはすべて完売した。

表2 大学祭総売上（単位：円）

部門	売上	経費	純利益
クッキー	87,600	33,379	54,221
アップルパイ	122,400	80,361	42,039
Gカフェ	226,000	115,051	110,949
合計	436,000	228,791	207,209

フードプロデュースでの活動をとおして、全員が誰かのために頑張ることができたのではないかと感じる。初めは、自分のことだけに一生懸命になり、他の人のことまで考え、助け合うことがなかなかできなかったが、大学祭が近づくにつれ、全員で助け合いながら活動ができたと思う。確認不足による、発注ミスや計量ミスなどたくさんの失敗があった。伝えつつもりや、確認したつもりなど「つもり」になってしまっていることが多かったため、きちんと全員で情報を共有し、確認しあうことが必要だと感じた。活動をとおして、相手のことを考え行動する力が身についたと感じる。これから自分のためではなく、相手のことを考え、行動できる人になりたい。（郡山彩）

VI. 地域貢献プロデュース

地域貢献活動は4年目を迎えた。1年次の春休みに錦江町役場のインターンシップに参加した4名の学生も加わり総勢17名での活動となった。今回のインターンシップは、錦江町田舎市場（2016年2月6日～2月21日開催）と半島隅くじら元気市（2016年3月5日、6日開催）において、特産品販売の補助を行った。錦江町田舎市場は、サテライフ紫原館で行われていた『獲れたて新鮮あったか市』に代わるもので、初の試みである。初めはボランティアの2年生に頼りがちであった1年生も、どうしたら商品の魅力をお客様に伝えられるかを考え、各自でポップを作るなど、積極的に活動した。14日間の研修中に、役場の方だけでなく、特産品販売の錦江町の方々とも一緒にお仕事をする機会を得て、活動が例年にも増して円滑に行われた。



図22 コラージュ

2016年度も、地域貢献プロデュースを選択した学生だけではなく、本学の学生たちの協力を様々な形で得ながらの活動となった。南大隅地区観光パンフレット事業では、従来の観光案内

パンフレットとは異なり、女子旅をイメージしたコラージュのパンフレットを制作してほしいとの依頼があった。担当した学生たちは、私的なコラージュの領域をなかなか出ることができず、大学祭で展示チーフであった鷺尾美鈴に協力を仰ぎ、無事完成にこぎつけた(図22)。

2016年度は、1年間の活動をレポート形式ではなく学生一人ひとりがA3用紙のポスター形式で報告した。どんな活動があるか、一目でわかる資料として価値があるため、今後も継続し、完成度を高めさせたい。学生の振り返りでは、「さまざまな活動に参加し、自分に足りないものは何かを毎回考えさせられた」、「以前より周りを見て行動することができるようになった」等の気づきがあり、活動を引き継ぐ後輩に向けて「大きく成長できる場」であることを伝える学生が多かった。個人差はあるものの積極性が身についたと一定の評価を得ることができた。活動の詳細については、チーフである福永裕美の報告を参照されたい。(森永初代)

2016年度は、例年の「オブシア錦江町田舎市場」、「半島隅くじら元氣市」、「おはら祭り」、「いきいき秋祭り」での販売補助、水田での田植え・除草作業・稲刈り、錦江町の特産物を使った商品企画に加え、新たなPR活動を行った。

過疎化が進む中でもっと多くの若い世代に錦江町の存在を知ってもらいたいという錦江町役場の熱い思いに応えて、観光ポスターの制作に協力した。

11月に行った撮影の際は、錦江町の方々と1年に及ぶ交流のおかげで、緊張することなくリラックスして取り組むことができた。撮影は、場所ごとのイメージに合わせて、天候も考慮しながら行われた。例えば、花瀬川では学生が大きな葉っぱを手に元気よく飛び跳ねる様子を撮影した(図23)。七福神が宿るとされる神川大滝のポスターでは、7名の学生をモデルに立ち位置やポーズ・表情に気をつけながら撮影を行った(図24)。

ポスターは、写真の選定と合わせて、言葉によるインパクトも重要と考え、学生支援サイトで現代ビジネスコース1・2年生にキャッチコピーの応募を呼びかけた。錦江町役場の方々が選んだのは、2年生の上大迫みなみによるコピー「私は、流されない」であった。

この活動をとおして、錦江町の方々、カメラマンの方、そして、撮影準備や構図の提案をしてくださった株式会社総広の皆様常に支えられ、成長を見守られていることを改めて感じた。錦江町に一度足を運びたい、そのスポットで写真を撮りたいと思ってもらえるようなポスターにするため、私たちも積極的にアイデアを出し活動を行った。

錦江町が活気ある町となるよう、新たなPR活動にチャレンジし、少しでも力になれたことは、嬉しい。私自身も錦江町に足を運ぶ中で、若者が少なく、スーパーなどの店の数も限られて



図23 花瀬公園



図24 神川大滝

いる現状を目の当たりにし、少子高齢化と過疎化を身をもって知った。しかしながら、錦江町の方々は、過疎化による大変さを感じさせない明るい笑顔と温かい雰囲気私達を迎えてくださった。

この1年間、私は、活動をつないでくださった先輩の思いを胸にチーフを務めてきた。特に、人と人とのつながりの大切さを知り、常に周りの方々に支えられていることを実感した。最初は、私にチーフを務まるかと不安ばかりで、情報共有がうまくいかないこともあった。しかし、一人ではできないことも、地域貢献のメンバーやクラスメートと力を合わせると実現できることに気がついた。そのため、自分の意思を言葉で伝える力が向上したように思う。多様な活動をとおして、地域貢献メンバーの一人ひとりが、少しずつではあるが自らの役割を見出し、集団の力を高め、互いに協力することができたように感じる。これからも、錦江町の方々とつながりを大切に、協力を続けていきたい。私たちの活動を喜んで引き継いでくれた後輩たちには、私たち以上の活躍を期待したい。(福永裕美)

Ⅶ. 結び

もともと、Gプロジェクトは、「トリプルパワー・リフレッシュ教育戦略—コミュニケーション力・プロデュース力・グループ力の育成—」という課題名で、2008年度から3年間、文部科学省の「私立大学等経常費補助金特別補助〈教育・学習方法等改善支援〉」における「学生の実体験を重視した教育研究」の一つとして採択及び交付を受けて、進められた。

2016年度のGプロジェクトのテーマは、大学祭全体のテーマである「Never change～終わりなき物語～」をもとに学生が考え、「Grow Up～咲き始めた花たち～」に決まった。現代ビジネスコースでは、個々の学生がグループ活動つまり協働の中でのコミュニケーションを通じて集団の中で自分たちをプロデュースする力の育成を目指し、専門教育カリキュラムの特別研究に設けられた6つのプロデュースにもとづき、個性の伸長をはかるとともに、学生の総合的な人間性を高めるという目的を掲げてから、9年も経過している。

今回、大学祭のGプロジェクトに関するアンケート調査を行う予定だったが実施まで至らなかった。そこで、3月の卒業研究発表会直前、現代ビジネスコース1年生を対象に部門ごとにアンケートの案を出し合い調査を行ったが思うような結果が得られなかった。2017年度は、具体的な実施に向け、アンケート調査項目を整理し実施予定である。

毎回、“Gプロジェクト”を通じて、学生が多く困難に直面しながらも、自分の能力を最大限に発揮し活動する機会を得たことは、大きな収穫である。友人や地域との協働で何かを成し遂げるためには、多くのことが要求される。すべての学生が「コミュニケーション」の難しさを知ると共に、「報告、連絡、相談」の大切さと「確認」の必要性を実感したはずである。

これから社会人として活躍する学生たちが、「社会に必要とされる人材」として活躍するようになることが、現代ビジネスコーススタッフ全員の願いである。人間に無限の可能性が見出される限り、我々のプロジェクトはさらなる発展を目指してより精力的に続けられなければならない。また、学士課程教育における学士力を意識し問題解決能力の育成など教育の質的向上に向けて成長させていかなければならない。そこに、我々の教育戦略が存在する。

